



宮司プレス 第百七十五号

彦島八幡宮 宮司 ニュース
発行者 彦島八幡宮

宮司 柴田 宜夫

発行 令和三年八月十日

◇宮司の柴田です。 八月は、家の宗旨(しゅ

うし)が、神道の方、神道家(しんとうけ)あ
るいは、神徒(しんと)と申しますが、御先祖
様の霊祭(みたままつり)、中元祭(ちゅうげん
さい)を当宮の祖霊殿(そらいでん)にて齋行
(さいこう)します。 その中元祭の祭詞(さい
いし)の中に、「残暑(のこんのあつさ)独巖(こ
ご)しき中に」と奏上しておりました、立秋と
は、名ばかりで、殊(こと)の外(ほか)、残暑
厳しき毎日が続いています。 台風一過の今朝
(けさ)の境内は、いくぶん、しのぎやすくな
りました。 さらに、蟬(せみ)のぬけがら(空
蟬(うつせみ)といえます)をよくみかけるよ
うになりました、秋の気配を感じる昨今です。
「空蟬(うつせみ)の」という言葉は、「命(い
のち)」や「世、現世(うつしよ)」にかかる枕
詞(まくらことば)です。 蟬は、七年間、地
中にて生活し、地上では七日間しか生きられま
せん。 従って、その蟬のはかなさを、この世
の「盛者必衰(じょうしゃひつすい)」の無常
(むじょう)さや、限りがあり、しかも定め
ない人の命に例えているわけです。 宮司プレス

号(きかんこう)に、何度も掲載していますが、

日本三大随筆(ずいひつ)の一つである、吉田

兼好(よしだ けんこう)が書かれた「徒然草

(つれづれぐさ)には、「存命の喜び 日々

楽しまざらんや」と書かれています。 死とい

うものが、逃(のが)れる事の出来ない、恐ろ

しい憎(にく)むべきものであればこそ、今あ

る命を大切にしなければならぬ、そして、そ

の事こそが、「存命の喜び」であると説いている

のです。

◇われわれ人間は、自分の生死を自分でコント

ロールすることはできません。 天、すなわち

神様や自然といった人知(じんち)を越えた大

いなる力のもとに存在しています。 まさにそ

れは、遺伝子研究の世界的権威(けんい)であ

られた、今は亡き村上和雄(むらかみ かずお)

先生のおっしゃった、「サムシング グレート

大いなるなものか」ということではないでし

ようか。 村上和雄先生によりますと、一つの

生命細胞が、この世に生を受ける確率は、一億

円の宝くじが百万回続けて当たるほど希有(け

う)なことであるそうです。 われわれの命は、

奇跡のなにもでもありません。 八月は、私

は、鎮魂(ちんこん)の月だと思えます。 沢

山の方々の尊い命が失われて、そのお蔭で、私

たちは生かされています。 六日の広島原爆投

下の日、九日の長崎原爆投下の日、そして、十

五日の終戦記念日。 先の大戦では、軍人・民

間人(みんかんじん)含めて三百十万人の方が

が、亡くなられました。 そして、十一日は、

東日本大震災より十年と五か月の日。 その被

災された人々を勇気づけた「上を向いて歩こう

「見上げてごらん」を歌われた、坂本九さんも

亡くなった日航ジャンボ機が墜落したのが、十

二日です。 日本人は、死者への悲しみや弔(と

むら)い、魂(たましい)への慰(なぐさ)め

を和歌や詩に託して、何百年も経(へ)て語り

継いできました。 それは、「人は、屍(しかば

ね)になって死を迎えるのではなく、その人を

知っている人が一人もいなくなった時に死を

迎える」と考えられてきたからだと思います。

私たちも、決して忘れてはなりませんし、次の

世代にも伝えていかななくてはならないと思

います。

◇西洋人からすると、日本人は、あまり死を恐

れず、むしろ時として、身近なある親しみをも

っていると思われるようです。 その理由

を民俗学者の柳田國男(やなぎだ くにお)

さんは、いくつか述べられています。ひとつは、死んでも魂(たましい)は、身近にとどま
って遠くへはいかないと考えられていました。
故郷の山の高みにとどまられて、生かされてい
る者を見守ってくださる考えたのです。二

つめは、生かされている者の住む現世と死者の
世界である幽世(かくりよ)の間の行き来が出
来ると信じていました。お盆に、故郷に、お
帰りになるわけです。三つめは、生きていた
ときの念願(ねんがん)が、死後に叶うと信じ
られていたのだそうです。無念の思いや果た
せなかった夢を残されたものが継承(けいしよ
う)する、死者の思いが生き続けていくのです。
まさに「生中死 死中生(せいちゆうし しち
ゆうせい)」、祈りを捧げ、生かされている者、
死者も「浄化(じようか)」され、やがて、「昇
華(しようか)」されていく、これが、日本人の
死生観でもあり、日本人の根源的な宗教観な
のではないのでしょうか。お盆は、生者と死者と
の間の魂の交感(こうかん)であり、親や親族、
子供とのつながり、家そのもののつながりを再
確認する瞬間でもあります。失ってはなら
ない美しい風習であろうと考えます。大切に
したいものです。

◇前述(ぜんじゆつ)した「徒然草」には、「死
は前よりも来(きた)らず、かねて後(うしろ)
に迫(お)れり」とあります。人は誰でも、死の来

ることを知っていますが、そんなに急にやって
くるとは思ってもいません。しかし、死は、
予期せぬ時、突如(とつじよ)として来るので
す。そういう覚悟をもって日々を生きよと兼
好さんは、私たちに問いかけています。

◇確実な証拠(しようこ)のある「歴代最高齢
人物(れきだいたいさいこうれいじんぶつ)」として
知られる、フランス人女性ジャンヌ・カルマン
さんは、西暦一、八七五年から一、九九七年ま
で、実に百二十二年という人生を生き抜かれま
した。その秘訣(ひけつ)について、「二つあ
ります。笑うこと。退屈(たいくつ)しない
こと。」と仰(おっしゃ)ったそうです。コロ
ナ禍ですが、よく笑い、たえず感性を研ぎすま
せて、好奇心を沸(わ)き立たせ、今ある命に
感謝し、生かされて活き活きと生きるという
「存命の喜び」で、日々をおくりたいものです。
御自愛ください。

◇八月の祭典行事予定(報告も含む)

▼夏詣花手水 第三段



▼月次祭 *八月一日、十五日

▼貴布祢神社、貴布祢稻荷神社月次祭

*八月一日

▼中元祭 *八月八日〜十五日

▼朝粥会 *八月二十一日

◇八月の宮司動静予定(報告も含む)

▼山口県神社庁神職養成講習会

□開講式(かいこうしき) *八月十七日

□講義 *八月二十日、三十一日

▼山口県神社庁下関支部

□支部幹事会 *八月四日

□支部総会 *八月二十七日

▼教誨活動 ※美祢社会復帰促進センター

□集合教誨(女子) *八月二十三日

▼地元迫町自治会

□盆供養 *八月十一日

□迫町自治会役員会 *八月十八日

▼人権擁護委員関係

□下関人権擁護協議会委員研修会

*八月二十六日

▼初盆詣り

□神職関係、神道家 *八月十三日

□六連島 *八月十四日

□総代、奉賛会、敬神婦人会関係他

*八月十五日

▼学校運営協議会(CS)関係

□玄洋地域協育ネット協議会

*八月二十日